

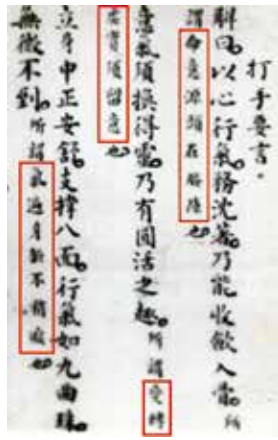
古典研究会 研究発表

是為論 ~是を論と為す~ ⑭

『打手要言』第1段 (その1)

今回より『打手要言』(『太極』第251号参照)の各段落を順にご紹介します。『十三勢行功要解』とも呼ばれる『打手要言』第1段落目について、その特徴と原文、意識文を掲載します。

第1段(『十三勢行功要解』)では、『太極拳経』(『太極』第245号参照)の文言や、『十三勢歌』(『太極』第242号参照)の複数の言い回しを引用しながら、意をもって気を運行することの重要性などを説明しています。武禹襄(『太極』第251号参照)や李亦畬(『太極』第249号参照)が、『太極拳譜』の内容を重視していたことが分かります。



文章は「解曰(解いて曰く)」で始まりますが、これは「『十三勢歌』等から武術の要領を解説すると…」という導入の言葉と考えられます。ひと区切りごとに、文章の最後には『十三勢歌』の言葉が小文字で引用されています。引用部分の前に、必ず「所謂」とあり、「『十三勢歌』で言うところの、このことなのです」と説明をしているのです。上図に「郝和本」の画像の一部を参考資料として提示し、引用部分を赤枠で囲みました。

~原文~(「郝和本」より)

解曰。以心行氣。務沈著。乃能収斂入骨。所謂命意源頭在腰際也。意氣須換得靈。乃有円活之趣。所謂變轉虛實須留意也。立身中正安舒。支撐八面。行氣如九曲珠。無微不至。所謂氣遍身軀不稍痴也。発筋須沈著鬆靜。專注一方。所謂靜中觸動動猶靜也。往復須有摺疊。進退須有轉換。所謂因敵變化是神奇也。曲中求直。蓄而後発。所謂勢勢存心揆用意。刻刻留心在腰間也。精神提得起。則無遲重之虞。所謂

腹内鬆靜氣騰然也。虚領頂筋。氣沈丹田。不偏不倚。所謂尾閭正中神貫頂。満身輕利頂頭懸也。以運氣運身。務順遂。乃能便利従心。所謂屈伸開合聽自由也。心為令。旗氣為旗、神為主帥、身為驅使。所謂意氣君來骨肉臣也。

~意識文~

解いて曰く。心(意)を用いて気を巡らす。務めて浮つかず沈著すれば、背骨に気を取める感覚になる。所謂(歌訣『十三勢歌』の)「意の命ずる源は腰際に在り」である。意と気が活発に轉換すれば、動きはしなやかで滞らず生き生きとした様相を得る。所謂(歌訣の)「虚実の変転に須く留意せよ」である。

姿勢を中正にして、穏やかに伸びやかに安定させる。内気を多方向へ拡張させバランスを取る。気の運行は、中の空洞が曲がりくねった宝珠の九曲珠に、うまく糸が通り抜けるようにスムーズである。所謂(歌訣の)「氣は遍く身軀をめぐり稍しも滞らない」である。

発勁では鬆、静、沈着を実現して勁を一点に集中させる。所謂(歌訣の)「静の中に動に触れ動きて猶靜のごとし」である。攻防において上体には折疊が、歩の進退には轉換が必要で、いずれも虚実を鮮明にする。所謂(歌訣の)「因に敵の變化に神奇を示す」である。

曲げるのは後で伸ばすためであり、勁は蓄えた後に発する。所謂(歌訣の)「勢勢に心を存ち意を用いて揆り」、「刻刻に腰間に心を留め」である。

精神を奮い起こすことができれば、動きが遅れたり重くなる心配がない。所謂(歌訣の)「腹内を鬆靜にして氣は騰がるに然り」である。虚領頂勁、氣沈丹田、不偏不倚。所謂(歌訣の)「尾閭を正中にすれば神は頭頂を貫き」、「満身を輕利にするには頭頂を懸げる」である。気を全身に満遍なく巡らすことができれば、ようやく動作は心の欲するまま思い通りとなる。(歌訣の)「屈伸と開合に自由を聴くことができる」の境地になる。

心は軍令、氣は軍旗、神は統帥、身は驅使される兵卒のようである。所謂(歌訣の)「意氣が君主であり骨肉は臣下である」のことである。

※次回は、この文献のポイントを解説します。

協会ホームページには過去の回もすべて掲載しています。QRコードを読み込んでご覧ください。

